

太陽と緑の会・徳島福祉リサイ
クル／〒770-0003 徳島市国府町南
岩延／88088(きよ)／代表者
・近藤文雄／責任者・杉浦良
月刊福祉機関紙／毎月五日発行

《読者の通信から》 編集部

本紙の創刊後、読者の方々からお便り
をいただいた。励まし、素直な感想、批
判と内容は様々だがここで一部を紹介し
たい。

太陽と緑の会代表の近藤は、筋ジスに
挑む医師として仙台で活躍した。その知
己、現在は鹿兒島に住む筋ジス患者Sさ
んからの便り。「創刊おめでとう。私も
筋ジスという大きなハンディを持ってい
ますが、近藤先生にいつも励まされてお
ります。今私たちがリサイクルのことを
考え、共同作業所と結びつけて障害を持
つ者がいきいきと生きられるようにと、
小さな運動をはじめつつあります」この
他にも、地域に根ざした障害者運動への
関心から、資料の送付や見学の依頼があ
った。

徳島市のTさんからは、ひらがな書き
の心暖まる便りが届いた。Tさんはスタ
ッフと普段着のつきあいができる人。「
せんじつはきゅうりとなすび、たくさん
くださいまして、たいへんありがとござ
いしました。なすびはやいたりたいたり
、きゅうりはあえものにして、おいしく
いただきました。しんせんでピカピカひ
かかってとてもおいしかったです。とくに
これをつくってくださったおかもとくん
、ありがとございしました」岡本君は河
原を開墾した畑地で野菜を育てる。それ
がリサイクルを支える人たちの食卓を潤
すまでになった。

Mさんは、神山町に窯をもつ陶芸家の
奥さん。自らも絵筆をもつ。和紙に墨書
きの便り。「かわらばん、おもしろく拝

読しました。良さんはじめ、みなさんの
様子、生き生きと伝わってきます。ガン
バトルナ！と、こちらもはげまされる
思いです。／ずいぶん仲間がふえたくん
ですね。私知っていますのは、良さん、名
田さん、井口さんぐらいで、後の方は名
前と顔が一致しません。それだけござ
たしているということですね。良さんの
レポートをみると、本当に個性的な
メンメン、皆さんと知りあえるのが楽し
みです」

杉浦の友人で第二びわこ学園で働くE
さん。「五年の歩みを同行のメンバーと
の息づかいの中で感じる事ができまし
た。／体験レポートの一文、細かで生活
があつて、びわこ学園の子供たちとのあ
りうべき関係に照らし合わせてみたい気
持ちで読ませて頂きました」本紙は福祉
現場の指導員、保母との意見交流の場
もありたい。

国家公務員Kさんは徳島在職中、福祉
リサイクルへの理解者だった。現在は福
岡に移っている。「ゆつくりとしかし確
実に福祉リサイクルの世界が徳島に根づ
いてきたようですね。／福岡では今、学
校の整備などをしていいます。そのなかで
養護学校、盲・聾学校の総合問題など、
色々難問が多いこの頃です」放置自転車
の再生が福祉リサイクルに任せられるに
ついては県や市の前向きな理解があつた。
Kさんとは重要な問題がさつとばらんに
話し合えた。

「スギウラ君の文章はハードボイルド
タッチ！大好きです」と踊るような文章
を寄せてくれたのは、東京のDさん。過
激で熱っぽいコメントが続く便箋に、編

コラム「ダスコの広場」

夏は太陽がカッと照ってくれる事で、
納得行くものですが、今年はどうも蛇の
生殺しのようではないかと。

八月五日、小松島・地蔵寺の副住職服
部さんが、名田さんのお母さんの供養に
来てくれました。私が知る限りではここ
数年、埃りまみれになったお仏壇と、お
母さんの位牌が、月の宮作業所にポツン
と置かれていました。笠原さんの御協力
で国府店の二階に個室ができ、名田さん
とお母さんの同居が可能になりました。
雑巾掛けされ、お水を供えられた仏壇の
横に花が置いてあります。朝早く歩いて
名田さんが自分の給料から買ってきたも
のです。三畳の部屋で、お経をあげる服
部さんと名田さんの二人の姿がいつしか
交錯し、どこか曼陀羅の世界に漂い
神秘的でもありました。

お布施はコーヒー一杯で、という無茶
なお願いを心良く引き受けてくれた服部
さんと、水一杯、花一輪供えることもな
かった名田さんが、お仏壇の前で出会っ
た事で、本来的な仏教の原風景を思わず
にはいられません。多分この様に
して、人々は自分のそして人生のどうし
ようもなさを乗り越えようとしてきたの
でしょうか。名田さんのどこか清しい
表情に今迄心の居場所を見つけられない
でいた彼の奥底の空虚感がポロリと音を
たてた気がしました。

「どうも有難うございました」の言葉
に「どうもどうも」とニコニコしながら
坊主頭をかいていた服部さん、有難う。
今夜も名田さんはお母さんの仏壇と一緒
に寝苦しい夏の夜を寝返り打ちながら眠
っております。外では雑種ダスコが野
良雌犬ハイエナと一夜を共にしておりま
す。お腹の子供の父親はダスコなのか、
野良犬クロなのか、意見が分かれており
ます。ダスコ、しっかりしておくれ。

(杉浦記)

私はまだ会社員をしていた頃（と言っても昨年ですが）、休みの時には「ちくま工芸研究所」というところに行っていました。

そこは、精薄などの障害をもつ人とともに、廃油石鹼づくりや不用品の回収とそれらの販売、お土産品の内職やちょっとした農作業をしているところです。

そこで私は、店の手伝いや倉庫の片付け、庭の手入れなど、いろいろしました。頼まれたこと、頼まれないこと、いろいろしました。

なぜ休みの日にわざわざ「ちくま」に行ったのかと言うと、「ちくま」に行くことによって、私は「精神的な報酬」を得ることができたからです。

「報酬」は、その時々で様々でした。回収した不用品のちよっとした修理をしただけなのに、思った以上にもらった「ありがとう」の気持ち。

「来週の日曜日、バザーがあるんだけど」とか、「たんすの配達があるんだけど」とか、頼ってきてくれること。知らなかつた情報を教えてもらえたこと、などなど。

しかし、最初から「報酬」を期待して「ちくま」に行ったわけではないのです。そこで働く人に、何となく興味を持ったことから始まったのです。「ちよっと見に行こうかな」そんな簡単な気持ちから

「ああ、ここ人手がないみたいだから、ちよっとやってみようかな」に変わり、そこで「報酬」に気がついたのです。

そして、「報酬」に応えるためにもっと積極的に「ちくま」に行くようになり、そんな関係がもう二年以上続いています。

このように荒川流のボランティア活動は、お互いに利益があります。だから、長続きするのです。

私は、この徳島福祉リサイクルに四月の終わりにやってきました。始めの一月は、この活動に慣れることで必死でしたが、その時期を過ぎると、「どこか違ったところに行こうかな」と思いはじめました。毎日の不用品回収、店内整理などや、共同生活がイヤになったわけではなく、自分がここに在るメリットがわからなかつたのです。

でも、よくよく考えてみると、「報酬」は幾つもありました。「ミスをしたのなら、早く言わなくちゃ」「自分の都合だけで時間を変えてはいけない、もっと相手のことを考えなくちゃ」などと、エラそうに注意していたことが、実は会社員の頃、自分が言われていたことだと気がつくことができたこと。

障害をもっていることで、「なにもできないんだ」と思われているけれど、「そうじゃないんだ」ということがわかつたこと。

自分と違つた意見や行動に対して、すぐ批判をしていたけれど、それでは「相手の本当の気持ちはわからないんだ」。改めなくてはいけないことがわかつたこと、などなど。

「報酬」が見つけれられたことによつて私は今、福祉リサイクルにいます。しかし、課題が無くなつたわけではありませぬ。

まだまだ、自分のマズイ部分が変わつたわけでもないし、リサイクルのスタッフとの関係も一方通行のところもある。一年間ボランティアの期間は来年二月までだけど、これからも、「報酬」を捜しながら活動していこうと思います。

「荒川流のボランティア活動」それは相手も利益を得られ、自分もいろいろなことを勉強をできることが基本です。

荒川の髭は強い／高山のハイマツに似ている／森か谷に住む樵の如く神々しい。

協力者名簿（一九八八年八月）
敬称は省略させて頂きます

*回収先

- 「徳島市」英、辻、西村、今枝、谷崎、大崎、内浜、岡山電氣、野上清水、片島、板東、泉、関本、大東吉村、乃一、三谷、いせや、身体障害者センター、佐藤、山本、和田、竹田、般若院（宮崎）、大広、浜田山下、大村、多田、原田、阿部、森山本、玉西、釜心、佐藤ヒル、越智園田、須摩、赤沢、吉見、浜口、森是安、松井、竹田、立花、工藤、米田、郡、小松、小島、須摩、山下井上、坂野、松尾、片山、宇都宮、いせや、楠
- 「鳴門市」西岡
- 「小松島市」田村
- 「石井町」川島、友成、中東、中土井
- 「川島町」竹條、「藍住町」北岡、「上板町」松尾
- 「鴨島町」竹山

*持ち込み者

- 「徳島市」沢田、瀬ノ上、中村
- 佐藤、木内、藤田、溝杭、尾原
- 近藤、篠原、阿部、林、宮本、宮尾、工内
- 「山川町」藤本
- 「藍住町」坂東、北岡
- 「勝浦町」登木
- 「石井町」中
- 「川島町」竹條
- 「上板町」松尾

*寄付者

- 浜（二千円）、井沢（二千円）
 - 吉村（千円）、和田（五百円）
 - 松原（百円）、杉山（五百円）
- ご協力、ありがとうございます

「インフォメーション」

①コラム「ダスコの広場」の開稿

今号よりコラムの欄を設けました。執筆は杉浦の担当です。コラムの名称でもあるダスコとは福祉リサイクルの飼犬。数限りなく愛を享けたダスコが精一杯の恩返しをするコーナーとか？初回、ダスコが取り持つ縁なのかどうか、名田さんにはかけがえのない一冊が訪れました。次号以降、連載されます。

②福祉施設より園外実習の依頼

精薄者通所授産施設「あけぼのセンター」に一年余り通つて訓練を受けた数藤君が、福祉リサイクルに紹介されてきました。八月二十六日からここでの作業を開始。連日、羽ノ浦の自宅から通い詰め、新たな場を力発揮しつつあります。

③一年間ボランティアの仲間が来訪

八月十七日の夜、荒川君の友人二人が突然訪ねてきました。青年ボランティアとして広島県で活躍している二人です。フレッシュな男性と女性。一晚をここで明かし、翌日にはリサイクル活動も体験。時間ギリギリに高徳線に駆け込みました。

④国府店の営業内容

- *営業時間 午前十時～午後六時（水曜日定休）
- *販売品目 家具、電化製品、衣類、雑貨、食器、古本、玩具、アンティーク等
- *定例バザーについて

*日時 九月二十五日（日）第四日曜日

*場所 近藤整形外科駐車場

*販売品 徳島市より譲渡された放置自転車修理・再生を終えたものを

約一〇台

⑤機関紙購読について

本紙の定期購読希望者には年費千円で、毎号を郵送。なお、本会の口座番号は、徳島2144703です。

昭和六十二年九月上旬、一通の紹介状を持って、M君が福祉リサイクルにやってきた。

仕事から帰ってくるのを大分待つてくれたか、そわそわと落ち着きの無い態度でポツンと立っていた。二人でテーブルに座り、コーヒーでもと言つと、「自分は胃の調子も良くないので、余りコーヒーは飲まんけん……」

牛乳瓶の底の様な眼鏡を掛け、顔色も悪いやせた男性だった。話をしている最中も視点が余り定まらず、手を頬に当てながら、周囲を気にしている様でもあり、又ジッと虚空を眺めているようでもあるといった印象だった。

私は一通り福祉リサイクルの作業内容について話した上で、「水が合う合わないという事もあるので、とりあえずいろいろな作業をやってみて、一週間ほどこの様子を見てみたらどうか」と伝えた。

その日、徳島駅まで私を送って行った。途中、彼から、若い頃、小児性関節リウマチにかかり、入院した事、白内障で水晶体を削った事、本当は高校に行きたかったが、中学校でやめてしまった事、今迄働いていた掃除会社は、ヤクザみたいな人ばかりなのでやめてしまった事、などを話してくれた。ただどこか言葉の端々にかげりを感じさせる、雰囲気を持っていた。

駅に着きかけた頃、私は彼の話の中に感じられる「ある種の合理化」に少々くたびれてしまつて、「まあ、それはそれとして、明日からボチボチとやらんか」と言葉を返した。

「言つとくけど、ワシは知恵遅れでないんでヨ」

言葉が孕んだ意味の大きさに狼狽しながら、「知恵遅れではないというのはどういふことや。そんなのはどうでもいい事や。明日から頑張つてやつとくれ」私はそう返答するのが精一杯で、ようやく軽トラのドアを閉めた。

福祉リサイクルは、心身障害者小規模通所授産施設という事で、運営費の十分の一ほどを市と県からいただいている。あとはリサイクル活動という事で市民の方々の協力を受け、一人一人のメンバー達がそれぞれ頑張つて行く事で成り立っている。

私はM君の存在を、どのように一人一人のメンバー達と絡み合わせていったらいいのか、考えあぐねていた。

一通りの動きを見てみると、磨いたり、拭いたりする作業や、回収作業のうち、トラックでいろいろな所に行く事などに、抵抗なく体が動いている様だった。なるべく

回収と一緒にいき、彼から蛭と出てくる言葉を、私なりにつなげていく事にした。

「今の母親は自分の本当の母親ではないんでよ。こまい頃、離婚して。小学校五年の時、先生から勉強がついていけないので、特殊クラスに入つたらと言われたんで。格好が悪かつたけん、しゃあないわな。中学校は普通のクラスで、勉強も嫌いやつたけん、現国の点数は良かったで。体育は体が弱かつたけん、あかんかつたな。勉強はできんかつたけん、努力せんかつたら、誰でもできんわな。頭はほんなに悪い事はないと思つわ。しんぼうが足りんかつたんや。自分は人の事を気にするタイプで、一度言われた事をいつまでも気にする性格や。あの子に何ぞ言つたら、気にして、学校に来んようになるといかんけん、言わんようにと、先生がみんなに言いよつた。暗い気持ちでええ事なんか無かつたな。もうちょっとええ先生がおつて、しっかり教えてくれとつたら、高校にも行けとつたんや。中卒だつたら、格好が悪いしな。若い頃、もうちょっと、頑張つとつたら、就職もできたけん、体が弱あて、ずっと入院しとつたけん、しゃあないわな。三十二にもなると、もう、学校の勉強もだんだん忘れてしまつし。漢字や歴史はようできたんや。前、ワカメのアルバイトをしたけん、死にそうやつたわ。何十キロあるか知らんけん、アントニオ猪木みたいな人やつたら、やれると思つけん。時給七百円やつたわ。あんな仕事は筋肉があり、プロレスラーみたいな人でなかつたら、とてもできんわな。自分みたいな体やつたら、まずは体力をつけんことには、三回目に自転車帰つて来る時は、足が動かかんようになったわ。続かんわ。ここに来る前の会社は、掃除の会社やつたわ。ヤクザみたいな人ばかりで。ああいう所は、ほんんな人多いんちがうんで。胸ぐらつかんで、『ワシの言う事が聞けんのなら、どなんなるかわかつとんな』言うしな。ヤクザもキチガイも一緒やな。頭がどっかおかしいんで。ああいう人、相手にしとつたら、こつちが何されるかわからんし、やめたわ。最後はちゃんとしていかんし、服と靴も返したけん。ああいう所はあかんわ。暴力はいかんわ。頭がおかしい人がようけおるわ。余りかわりも持たんようにせんとな」

福祉リサイクルに來だして二週間ほどたつて、一度ここで皆と一泊したらと提案した。他のメンバー達の輪に入る契機にもなるだろうし、最初、体を鍛える事にもなるといつていた自転車での通勤も、膝が痛いという言葉が出だしたからだ。他のメンバー達と一緒に寝る事の抵抗感もあつたので、一階の個室にベッドを用意した。これをきっかけに、彼が宿泊する回数が増え、いつの間にか家に帰らなくなつた。

「M君、このままではいかんと思つ。最初、通勤すると約束したのに、ずるずると泊まり続けては。それと家の人にきちんと連絡しているのかい？」

家には、本人がまともではないと話す、叔父さんがいる為、家から離れた納屋で寝泊まりしている事、食事はおばあさんが置いていつてくれたり、一食二百円の定食を

食べたりしている事、父親、母親は自分の面倒を見てくれず、おばあさんがやってくれている事などがM君の口からこぼれた。

おばあさんと会い、休日の前の晩とその日の晩は家で、他は福祉リサイクルで寝起きする事に決めた。帰ってこんので、変な人に連れて行かれたのかと心配していたとおばあさんが話してくれた。ただ、M君が、叔父さんの存在に異常とも思われる警戒心と嫌悪感を抱いているのと、彼の言葉から伝わる、ある家庭の跛行を毅然と打ち消すおばあさんの姿勢が気にかかった。叔父さん、お父さん、お母さんには会えなかった。

共同生活、共同作業という意味が彼にとって、非常に大変な重みを持っていた。

夜、借りてきたビデオを皆でこたつに入りながら見ている。手足をこすりながら、五メートルほど離れて、彼が一人ポツンと眺めている。皆がテレビを見ながら、雑談をしている横で、一人洗面所に入り、鏡に映った自分の顔を、なにやら一時間も覗き込んでいる。他人の使ったタオルがなかなか使えない。テーパーの一番端で、御飯におかずから汁から全部入れて、かきこむ。大皿に盛ってあるおかずを、全部食べきれないにもかかわらず、自分の小皿に山盛りにしておかないと気がすまない。自分の家から、ダンボールに入った持ち物を山ほど部屋に持ち込み、夜、ゴソゴソと何時間も、出したり入れたりしている。言われた作業はきちょうめんにするが、その間、何度も何度も二階の部屋に足を運び、ゴソゴソと持ち物をいじっている。鍵は絶対にかける。今迄の彼の日常が見え隠れする。

三箇月ほどたったある日、高松の友人宅に回収を兼ねて、四人で一泊する事にした。途中でアイスクリームとたこやきとビールを買う。M君が出来立てのたこやきの袋の中に、自動販売機で買ったアイスクリームを押し込んだ。「何をしてるんや。せっかく、熱々のたこやき、お土産に持って行くかと思ってるのに」キョロキョロと見回しながら、表情が硬化してくる。「他に入れるもんがなかったし。そんなん、別にいいでえ」一言の佐びですむ出来事だが、そういう展開にならない。「長い間、入院しとって、勉強も遅れてしもうとるし、ほんな事はわからん」「別にそんな意味違うやろ。すみませんでいい事、違うで」

夕食後、皆でテレビを見ながら話している間、一人、洗面台の鏡をウロウロしながら、覗き込んでいる。じっと待つしかない。翌日の晩、私が帰宅しようと思っていると、「昨日は悪かった。自分は人になかなかあやまれのや」第一の関門。

日々の共働作業、共同生活が、次第に彼の表情と動きを柔和なものに変えて行く。信頼できる人を求める気持ちと、心を開いてしまうことで、何かが崩れてしまうのではないかと怯える肉体が分離しはじめ。葛藤と苦悩が、表情が柔和さを取り戻す過程に、ドロッと飛び出してくる。それは自虐と他虐の方向に方位を定め、自分ではと

ても立ち打ちできないと感じる人達とそうでないと感じる人達とに分かれて、噴き出す。スタッフの一人と口論になる。「あんたやって、偉そうに言うても、杉浦さんに雇われとるんでないで」M君から飛び出した言葉に、彼の感情のバランスが壊された。M君の他虐の感情空間から、脱け出す事で、出口が見つかる場合もあるのだが、彼にはその経験が乏しかった。それ以来、M君は彼を極端に避ける様になった。避けるだけならいいのだが、そこに言葉が介在する。「あんなヤクザみたいな人とは、一緒に仕事なんか、できんで。何するかわからん人とは、かかわらん方がええわな」

M君が休むようになった。おばあさんとの電話と彼との電話対応で、一週間後、復帰した。M君の精神的地平を説明する事と、それをとりあえず受け入れる事から出発する必要性を伝える事で、時間はかかったが、一緒に回収にも行けるようになった。彼は自殺したアイドル歌手のファンであった。そして、梅津カズオの恐怖マンガや、スリーパー映画を話題にした。他のメンバー達とレンタルビデオを借りてきた。アイドル歌手のプロモーションビデオ、スリーパーもの、シュワルツネッガーやモハメドアリが登場するビッグパワーもの、文部省特選もの、小さい頃にテレビで放映されたマンガやSFものなどだ。一緒に見ようと、他のメンバー達を誘った。私にもビデオの感想を聞いた。傾向を知りたくて、最初はつきあっていたが、内容自体に興味を感じる物は少ない。多分一人で映像を通して、憧れやある種の恐怖感や懐古の追幻想に、身を浸した何十年間、画像を眺めている彼の背中にジワッと染み出してきた。

日常では確実な変化が見られた。表情を取り戻す中で、自分で判断しながらの行動も出はじめた。夕食を一緒に作る事で、ある自信が感じられた。自転車磨きは、岡本君ほどのパワーはないにしても、コツコツときちようめんにやれてきた。戸締まりなどは彼の担当だ。カレンダーに予定を書き込んだり、農作業の作付表に絵を入れたりした。注目すべきなのは、他のメンバー達に予定を伝えたり、段取りを指示し始めた事だ。福祉リサイクルの中で指示をするという事は、逆に指示した本人の実力が問われる事に繋がる。

四箇月後、皆と相談して彼の給料を二万五千円にした。一万円のアップだ。おおかたの生活は福祉リサイクルでしている為、実質的には五万五千円ほど支給している事になる。M君のあるポジションが高まれば、彼自身の広がりとなるが、それが普通の日常になるにつれて、「当り前の事」に色あせる。自立たなかった物が自立し始める。それと同時に、彼の心にある狡さが濃んでくる。

「皆がまだ頑張っているのに、一人だけ一階でさぼってたら、あかんで」私の言葉にキョロキョロと回りを見回して、「もう六時は過ぎとるで。それに腰が痛いので、近藤整形に行こうと思つて」。「もう仕事が終わつとるんやたら、いいけど、回収の荷物を今日中に整理せんと、雨に濡れてしまつやんか。それにお母さんだって、

時間なのに皆やっとなるぞ」仕事の時間が過ぎていくという言葉が最初に来た事で、少々腹立たしさを感じた。契約としての労働ならともかく、福祉リサイクルは、大変さを一人一人がそれなりに背負う事で成り立っている。近藤整形でマッサージをしてもらう事にしても、少々言い訳に近い。その辺を話しているうちに、言葉が介入する。「もう、ここをやめようと思つとつた」

福祉リサイクルにいななければならないという事もない。それは自由選択だ。身障者手帳や療育手帳があるかないかという問題の中身は難しい。ただ、ある事の大変さもない事の大変さも存在する事は確かだ。後者のM君には、現時点では背負いがたい厳しい現実が待ちかまえている。

例会に出る為に車を走らす。その後を彼が自転車で追う。その彼が今、部屋の外で近藤先生の奥さんと話している。一度やめるといつてしまった以上、やめないとけない事、まだ、借金があるので困っている事、家には叔父さんがいるので帰りたくない事。アンビバレントな感情が交錯している。「やっぱり、もうちょっとやろうと思つけんど……」

九箇月で四回目の挑戦になる。こんな繰り返しの中からしか、拵がりの糸は結べそうにもない。ただ、今迄九箇月間、このように持続したという経験は、彼の口から出てこない。

彼がNHK学園の現代国語の通信講座を始めた。今迄、書道講座や植木の講座やペン習字の講座を申し込んだものの、一つも続かず、請求書だけが家に舞い込んだと、おばあさんがこぼしていた。私にもその必要性を訴えるのだが、根底にすっかりした欲求が感じられず、どこかとりとめもない、中空に浮かぶ願望だけが一人歩きしている様に思われた。レポート提出の時には、皆に聞き回る姿が目立った。「高校のやけん、難しいわな」と彼がつぶやく。「教えてくれと言われても、良い点数取るんやったらやり方もあるけど、資格を取るんじゃなければ、自分でやったら、いいんと違つんで」「全部違つていてもかまわんから、出してみたら？」

第二回目からは、レポート提出さえできないだろう。走馬燈のような願望だけで続く筈はない。もう三十二才だ。M君なりの地平に根をはるようなアプローチからしか、彼の自己実現といったテーマに近づけるとは思えない。

十箇月たったある日、休みで戻っていた彼が帰つてこない。週に二回は家で泊まるといった約束が守られず、ずるずると福祉リサイクルにいるようになり、それを注意してからだ。行動パターンとしては、叔父さんがいるという事で、ここを出ていくのが十時を過ぎる。何度、話しても変わらない。「行くわ」といつてから、二、三時間はゴソゴソと部屋にいる。「帰ってくると思って、食事の用意もしてあるのに」おばあさんからの電話だ。叔父さんは家の近くに家を建て、別に住むようになったのにと

付け加えた。

三、四日して、隠れるようにして、彼が来た。

「やめるのはいいけど、どうするんや」

「ちょっと疲れたし、旅行もしたいし、叔父さんもおらんようになったし」

「将来の事考えたら、いつまでもおばあさんが面倒見てくれへんで。お父さん、お母さんともうまくいつてないんやったら、おばあさんが元氣なうちに、ここで自分の力をつけたい方が、いいんと違つん」

「ほな、明日からするわ」明日になつても仕事に顔を出さない。三、四日たつて、電話に応じてやつてきた。それも夜遅くだ。次の日から来る事を確認した。今日は帰ると、家に電話を入れるが、いつこうに帰ろうとしない。もう十二時を過ぎていく。テレビを見てコーヒーを飲んでいく。「いいかげんにしろヨ」。何時だと思つてるんだ。このまま、おばあさんを、夜中まで待たせておくのか」怒り声が一人のスタッフから放たれた。

M君宅に今迄の経過報告をしに訪れた。本人は福祉リサイクルに行くと言つて、まだ帰つてこない。多分実際には行つてないと思われる。おばあさんと話す。なんとなく、しっくりいかないものを感じる。M君が伝える情報に極端な歪曲があった。一つ一つ確認していく。以前少し働いた事のある掃除会社についても、随分親切にされたらしい。ただ、仕事が大変いかげんだった事の注意から「ヤクザみたいな人」に変質する。最初の三箇月ほどの彼の話のちぐはぐさからも解つた事だ。

「あの子に勤まる仕事が無い事はよく分かっていきます。屁理屈だけは一人前で。中途半端が一番大変ですわ。いっそ、もつと知恵が遅れとつたら……」

しかし、その後、どうしようもない愛情がへばりついてくる。M君が話した、デフォルメされた言葉の端々が、おばあさんの心につきささり、離れてくれない。「出て行け。おまえなんか、来るところじゃないぞ」そう言われたと言つていました。おばあさんがポツンと言う。本人が来たいと言えば、いつでも受け入れますから」彼の給料と彼の為に作った貯金通帳を渡した。帰り際にスイカを渡された。叔父さんについて、「あの子も、ほんなに悪い人間やない。本人の為を思つて言つた事で嫌われたんですわ」「かえつて家を作って住ませたのが逆効果だったかもしれん。自分で好き勝手にできるけんや」

御礼を言つて帰る。残念なのは、一度も彼の両親に会えなかつた事だ。大きな家にポツンとおばあさんが立っている。もう八十をとくに過ぎていくだろうに、しっかりしている。おばあさんが元氣な分だけ、M君の精気が吸い取られていくような気がした。いつの間にか、彼の自転車が置いてある。どこかに隠れているらしい。第五回目の挑戦を乗り越えられるのだろうか。

「奮つて」参加を

近藤 文雄

「福祉リサイクルかわら版」も漸く第二号を発行するまでになりました。予想以上の反響があつて、百名近い方々から御賛同を頂き、大変有り難く存じます。

「太陽と緑の会」の発端は、筋ジストロフィーの人々の苦哀を見るに忍びず、何とかして本病的治療法を見つけねばならない、という気持ちの人々が集まつて生まれた会でした。治療法を発見するのは安易なことではありませんが、とにかく、その目的につながることを今すぐ始めよう、ということ筋ジストロフィーの研究をする一大国立研究所設立運動を起こしたのが、昭和四十五年の暮でした。

その時は、三年間に全国から二十五万の人々が参加してくださり、昭和四十八年には国会に請願して採択され、当時の首相から必ず作る、という約束もとりつけ、昭和五十三年には小さいながらも研究所ができました。

その後、「太陽と緑の会」はボランティア団体として活動を続けて参りました。物質一辺倒、自己中心に傾く社会の流れに挑戦するドン・キホーテのような活動でしたが、会員の数は次第に減少して、実質的には中核の十名ばかりになってしまいました。それでも活動の火を絶やすことなく、些かな活動を維持して参りました。

そうこうする中、昭和五十九年に、愛知県から杉浦良君が、柳沢寿男映画監督の紹介で仲間に加わり、福祉リサイクルが始まりました。海のものとも山のものとも分かれぬこの仕事は、杉浦君の昼夜を分かたぬ奮闘と会員の温かい支援によって徐々に根を下ろし、積極的な支持者の数も次第に増えて、どうにか軌道に乗ることができました。

最近、渡部真明君が計に加わつて機関紙編集に当ることになったので、それまで手の届かなかった機関紙の発行がやっと実現した次第です。これからは、この機関紙を通じ、思いを同じくする人々が互いに結びつき、社会を少しでもよくするための活動を拡げていきたいと思ひます。

これまでも、「太陽と緑の会」は、指導者の方針に皆が黙つてついていくというやり方はせず、各人が独自の意見を持ち、自発的に活動をして、同調する人がそれに協力するという形をとってきました。これからは、「かわら版」を読んで頂くだけでなく、各人がポリシー・メーカーとして積極的な意見を述べ、建設的な活動を推進して下さるようにして頂きたいと思ひます。リサイクルや従来の活動の枠にとらわれない自由な発想による提案をお待ちします。機関紙にも奮つて御投稿下さい。

今、リサイクルが最も必要としているのは、純粹な意欲に燃え、バイタリティーに

溢れるスタッフです。将来の保証もない、荒野の開拓のようなこの仕事に賭ける有能な士を求めるのは、無理な注文かもしれませんが、現に何人かがそれをやっているのですから、他にもそんな人がいないとも限りません。心ある人の御参加を求めます。

〈出版案内〉

「筋萎縮症患者の手記」A五版 二〇〇ページ 定価一〇〇〇円
編集／近藤文雄 太陽と緑の会発行
昭和六十三年十一月三日発行予定

編集後記

道路を歩いてきた。空の青が濃さを増し、路上の影に深い水溜のような冷やかさを感じた。空の青も影の黒っぽさも、もう夏のものではなかった。舗道に一台の車が止まっていた。フロントに、染みのようなものが見えた。少し膨らみがあった。軽い風に合せて、ゆさゆさと踊っているようだった。僕はその正体を確かめたくて、誰のものともわからぬ車体に身を被せた。腕を伸ばして、その染みと見えた物を指先につまんだ。僕は「何だろう」と、目の前に近づけた。その時、声が出た。「桐の実」僕は声のした方を振り仰いだ。「それ、桐の実の殻よ」同じ人が重ねて教えてくれた。「桐の実」僕は教えられたことを繰り返した。その人はキーを回して、ドアのロックを解いた。「もう、赤とんぼも飛んでるわよ」そう言いながら、運転席に身を沈めた。ドアの締まる音がした。その人は笑った。僕も笑った。二人がほんの少し頭を下げ合つて別れた。僕は車の走り去った方角を見つめた。桐の実殻はのひらに乗ったまま。ゆさゆさと揺れている。まだその人は、夏のワンピース姿だった。

夏も間もなく背後に消えてゆこうとしている季節。第二号の編集も終わろうとしている。このスタッフにとって、夏の作業は言語を絶する苦役である。回収、磨き、修理、配達、店内整理、そして不用物の焼却、どれ一つとっても楽でない。全身汗だらけになって、太陽にカンカン照らされながら、仕事に精を出している。足下に広がる水田を渡る風はほとんど感じられない。頭上からは堤防を走る車の熱気がかぶさってくる。地鳴りを感じるよう落ちて着かない。まさに暑熱との闘いといつていい夏の日々だった。汗が光る。顔は泥と油で汚れた。「涼しくなったら……」という言葉がうわごとのように出た。その夏が過ぎた。どんな秋を迎えようか。

(T)